

UDLM

1

vol.354

January 31st
2025

まちの記憶

p.2-6 鳳明館と本郷の記憶
p.7-13 各館の魅力
p.14 みんなの推しスポット

△鳳明館台町別館屋上から見た本郷のまち

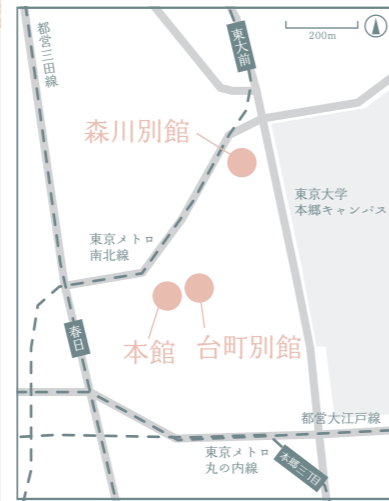
鳳明館の歴史

宿泊提供にむけて改修工事計画を進めている鳳明館。関東大震災も戦災もぐり抜け、再開発の波に飲まれそうになりながらも地元の人たちの力で生き残った、本郷のまちの記憶を残す貴重な建物。今回は、127年の歴史を持つ本館をはじめとする鳳明館三館の、こだわりと歴史が詰まった建築を、鳳明館の女将さんのお話に基づいて紹介していく。



鳳明館ツアー
 鳳明館の女将さんと存続に関わった三文字さんに解説していただきながら、マガジンメンバーで鳳明館三館を巡った。
 ◀ 鳳明館本館と女将さん

鳳明館三館



鳳明館は、本館、台町別館、森川別館の三館からなる。本郷のまちが時代とともに、下宿街から旅館街へ姿を変えていったように、異なる時代背景の中で作られた三館は、それぞれの時代の名残をとどめている。歴史と一緒に各館の違いを楽しむことができる。

▲ 鳳明館三館と本郷の地図

鳳明館本館

鳳明館で最も歴史の古い本館は、明治31年に建てられ、今年で築127年を迎える。木造二階建ての建物で、関東大震災にも東京大空襲にも耐え、登録有形文化財にもなっている貴重な建物。

本館はもともと下宿として建てられ、その後下宿兼旅館として営業し、戦後には旅館として一部を改築したという歴史がある。そのため下宿の名残をとどめており、客室の並びや出入口などに他の二館との違いが見られる。また、三館の中で一番最初に旅館に改築しているため、物資が豊かで希少価値が高く、様々な種類の建材が使われているのも特徴である。

鳳明館は鳳凰がシンボルに用いられ、玄関のお帳場など、建築の中にも使われている。



台町別館

創業者の自宅として建てられた台町別館。その最大の特徴は四季折々の景観を楽しめる豊かな庭園である。坪庭や縁側、応接間など、当時の個人住宅ならではの特徴が多く残されている。

戦後、旅館として営業するために敷地を拡大し、建て増しを重ねていった。そのため迷路のような構造も面白さの一つである。

当初の住宅部分は木造二階建て、増築部分は地上4階・地下1階のRC造となっている。



鳳明館の特徴

保存率の高さ

鳳明館三館の特徴は、何よりもその保存率の高さである。

本館は下宿街、旅館街の歴史、台町別館は個人住宅の歴史、森川別館は昭和の団体旅館の歴史をそれぞれ創業当時のまま受け継いでいる。

また、今では手に入らないような希少な建材も使われており、建築物としての価値も高い。

森川別館



森川別館は、かつて徳川家康の重臣、本田忠勝を初代とする本多家江戸屋敷だった由緒ある立地。かつての江戸屋敷の風格が前庭にあらわれている。

鳳明館三館の中で唯一、団体旅館として建てられた。そのため広々としたロビーや廊下は開放感に溢れている。建築的には、節約のために端材を活かしたしつらえや、細部までこだわった遊び心あふれる意匠が面白い。また洗面所のタイルなど、昭和レトロのポップな楽しさも味わえる。

台地の斜面に位置し、木造・RC造の地下2階、地上3階建てである。

細部へのこだわり

もう一つの特徴が建築のこだわりの強さである。当時は職人が豊富だったこともあり、昭和の旅館はどれも凝った作りになっている。

その中でも鳳明館は、創業者が普請道楽と言われており、誰にも気づかれないようなところにまでこだわり、遊び心が目一杯詰まっている。その点で他の旅館よりもこだわりの格が一段上だと言える。

歴史年表

鳳明館	本館建設 下宿として開業 岐阜県西美濃から上京 した丹羽源作が下宿として営業を開始する	下宿兼旅館として営業開始 岐阜県西美濃出身の小池英夫が下宿 鳳鳴館を買い取り、下宿兼旅館として営業を開始	旅館専門として改築 戦後、一部を改築し、旅館専門となる	台町別館開業 自宅として建築した建物を旅館に改築して開業	森川別館建設・開業 団体旅館として建設され、営業を開始	休業 コロナ禍が長引く中、他の旅館同様にマンションへの転用、旅館廃業を決定	存続が決定 鳳明館を愛する地元有志の尽力により、廃業の決定が覆り、松下産業が事業継承により新しい経営者となる
	1895	1898	1936	1948	1955	2021	2022
本郷	本郷下宿街の始まり 本郷で最初の下宿「菊富士楼」(のちの菊富士ホテル)が営業を開始	下宿街の発展 下宿に成功した者の親類縁者が上京し、近辺に下宿・旅館が増加していくことで東京最大の下宿街となる	旅館の最盛期 時代の変化とともに下宿が旅館に変わり、旅館街となる	東京大空襲 菊富士ホテルを含む、多くの下宿・旅館が焼失	団体客で賑わう 傷痍軍人や遺族会、修学旅行生といった団体客で賑わう	旅館の減少 時代の変化による様々な要因から需要が減り、マンション等へ転業する旅館が増加	現在 本郷の旅館として残るのは、「鳳明館」の三軒と「更新館」の一軒のみ
	2025						

参照：写真で綴る「文の京」歴史と文化のまち

本郷下宿街・旅館街の歴史

東京最大の下宿街

明治時代になり、大学が数多くできると、地方からの学生など、東京のあちこちで下宿街が生まれた。その中でも、本郷下宿街は東京最大の下宿街と言われている。

「本郷下宿街」は今の文京区本郷とは異なり、湯島から本駒込のあたりまでを含む本郷区はより広い範囲を指していた。一番多い時には、500ほどの下宿があったと言われている。

右図は明治から現在にかけての本郷の旅館の分布図である。古くからある旅館の多くは下宿から旅館になっているが、東京大学の向かいである森川町や菊坂町には、特に旅館がぎっしりと密集しており、下宿の中心地であったことが分かる。鳳明館が位置しているのもこのエリアであり、つまり東京最大の下宿街のその中心地という優れた立地を有している。

鳳「鳴」館

鳳「明」館は当初、鳳「鳴」館だったのではないかとされている。「明」と「鳴」に込められた意味には様々な説があるが、当時の時代背景から考察してみるのも面白い。



▲本郷の各時代の下宿兼旅館・旅館の分布 出典：文京建築会コース

本郷が最大の下宿街になったわけ

本郷下宿街がなぜ東京で最大になったのか。その理由は、下宿同士の助け合いが強かったからではないかと言われている。

実は、この下宿街の経営者の多くが岐阜県の西美濃地方というところから来ている。本郷で最初の下宿である「菊富士楼」(のちの菊富士ホテル)の創業者は、西美濃地方出身の羽田幸之助だった。菊富士楼が大いに成功すると、その成功を受けて、じゃあ自分もという形で同郷の人が来たが、当然援助がなくては開業は難しい。そこで羽田氏が資金援助をしたのだ。そうして来た人が成功すると、その人がまた同郷の親戚を呼ぶ。そういった繋がりの中で、どんどん下宿が増えていった。

羽田氏は、ただ資金援助をするだけではなく、ここの土地が出たから買い目だという情報も教えていた。また、旅館で共同購入することで建材を安く買ったり、戦後の食料が少ない時代には食料も共同購入をしたり、下宿・旅館同士の助け合いがとても強かった。

では、なぜ東京に来てまで、これほど助け合いを頑張れるのかというと、西美濃地方の地域性が由来していると考えられる。この地方は、川が密接し、洪水に大変悩まされた地域だっ

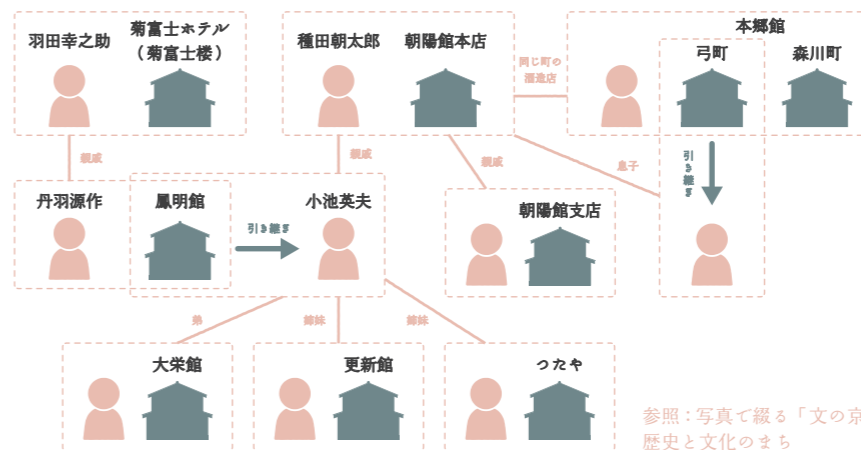
た。そのため、周りに堤防を築き、輪中の中で生活していた。輪中で閉鎖的だったこともあり、自然災害を防ぐためにも、また実際に起きた時にも、自分たちで助け合わないと生き残れないということで、助け合いの意識が強くなり、東京に来てからも繋がったのではないかとされている。

東京は地方から寄せ集めてできているまちであり、こういった共助の歴史というのは、都市形成、コミュニティ形成において非常に大切な役割を果たす。

鳳明館の助け合い

鳳明館創業者の弟が営む大栄館で、ある時火事が起こってしまった。その時、鳳明館では新築工事を控えていたが、それを止めて、今うちはそんなことをしてる場合じゃない、まず大栄館を助けなきゃいけないといって、鳳明館の発展を犠牲にしてまでも、弟を助けたという話がある。こうした親戚や同郷の仲間たちの助け合いが、本郷のまちに根付いていたのである。

鳳明館下宿相關図



鳳明館の創業者小池英夫も、母方の実家が営んでいた朝陽館の成功を受けて上京し、資金援助を受けて坂下で下宿を開いた。そこでお金を貯めた後に、坂上に来て鳳明館を買い、下宿兼旅館としての営業を開始した。この成功を受けて、姉妹弟の3人が上京し、それぞれつたや、更新館、大栄館を開業した。

本郷下宿街と文学

本郷下宿街にはかつて教科書に載るような有名な文豪たちが数多く住んでいた。文京区、文(ふみ)の京(みやこ)というのは、大学がたくさんあるからというだけでなく、多くの文学者たちが住んでいたからなのである。

菊富士ホテルには数多くの文豪が住んでいたとされ、赤心館や大栄館の前身である蓋平館別荘で過ごした石川啄木など、いくつかの下宿を転々としていた者もいる。また、下宿だけではなく旅館も文学との関わりがあった。出版社や作家自身が旅館を缶詰として使っていたのだ。朝陽館は手塚治虫の常宿だったというくらいよく使われていた。

鳳明館には文豪が住んでいた歴史はないというが、出版社の人が物書きを缶詰にするために使っていたという歴史はしっかりと残っている。文豪ではないが、鳳明館に下宿していた中で有名なのが、外務大臣の重光葵である。彼は日本が戦争で負けた時に降伏文書に調印したことで有名だが、アメリカの影響力を一生懸命に排除して、日本の自立を目指した人物でもある。当時の手紙の住所から、大学生の時に鳳明館に下宿していたということがわかっている。

現在ではそのほとんどが跡地という形でしか残っていないが、文の京の礎になっているのは、こうした下宿街や旅館街の歴史である。

団体旅行で賑わう旅館街

やがて需要の変化とともに、本郷は下宿街から旅館街へと移り変わっていく。特に戦後は団体旅行客で賑わうことになる。戦後一番の団体旅行客は、靖国神社に集団でお参りに来ていた戦死者の遺族や、地方経済の疲弊によって地方からやってきた陳情団だった。この時期は何事も団体行動が多かったという。その後しばらくすると、修学旅行生で賑わうようになる。というのも、日本では戦前からあった修学旅行を早くに回復させ、修学旅行のダイヤを作ったり、「ひので号」という修学旅行専用列車を作ったりと積極的に支援していたのだ。

右上の写真は、昭和40年代初めに撮影されたもので、本郷旅館街が賑わっていたのを最もよく象徴している。観光バスが、バス通りというバス通りに並び、先頭には先導車がついて、旅館の名前が入った小旗を持った旅館の女将さんが案内する。修学旅行の列車の定員がおおよそ1200人だったため、その人数を収容するために観光バスは20台必要だったという。当時、東京駅の周りには大人で宿泊できる場所がなく、東京駅で降りた人たちが観光バスに乗って本郷まで来て、それぞれの旅館に散っていった。昭和末期でも旅館が約40軒はあったという。

1200人も的人数を同じ旅館に収容するのは困難を極めるが、



▲バスまでお迎えする森川別館女将(1967年) 出典：鳳明館

鳳明館は三館あったため、合わせると1200人を全員収容することができた。といっても、三館合わせて800畳だったため、一畳に1.5人の計算である。そのため、当時の学生たちは敷布団をシェアして、掛け布団だけ一人一枚使っていたという。

当時は修学旅行の宿泊費を賄うために、修学旅行のお金に加えて、一人五合の米袋を持ってきていた。そのため、通りにはバスが列をなして並び、旅館の中には米袋が山のように積み上げられ、とにかく「集団」のものが多かったというのが、本郷旅館街が賑わっていた時の象徴だ。



▲本館の入り口

▲森川別館の入り口

下宿街の名残り

部屋の入り口

普通旅館は前室があり、ドアを開けたらスリッパを置くところがあって、またドアがあるという形だが、本館の部屋はふすまを開けたらすぐに畳があり、廊下に対して直接部屋が並んでいる。そのプライバシーのないようなところが、一つの下宿の名残りである。ただ、下宿だった時は47部屋あったのを、旅館にした時は26に変えているので、大きな部屋は何個かを一つにまとめてできている。

中庭

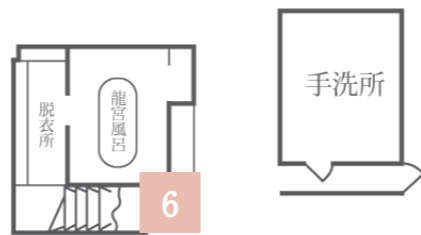
当時の下宿は上空から見ると、建物の形が口の字やLの字になっているものが多く、ここ本館は日の字になっていた。それはどれも中庭を有していたからであり、室内の採光を確保すること、木造のため風通しが必要だったことなどがその理由として考えられる。現在ロビーとなっているところは、下宿時代は中庭だったものを、旅館にするときに屋根をかけて屋内にした。当時の配管などがそのまま見えるため、かつて屋外だったことがよくわかる。



看板

本館に掲げられている看板だけ「明」の字が異なる。明の左側（日にあたる部分）は窓という意味を持っており、本館には端から端までびっしりと窓があり、台町別館と本館がお互いをお互いを見ていることを表しているのではないかとされている。

地階



本館一階



坂下る↑ 至小石川二丁目道路

至東京大学↓

ロビーの誕生

戦後旅館として営業するためには、大勢の生徒を収容する必要があった上、売店がないと旅館として成り立たない。そのため、中庭をつぶしてロビーに改築したのだが、ここの天井はとても簡易的な造りになっている。東京大空襲で、周辺の宿泊施設の多くが燃えてしまった状況で、団体客の需要が増え、少しでも早く改築を進めるためにこのようになったのではないかと考えられている。屋根の隙間からは外の光が漏れ、大雨のときは風向きによっては雨漏りもするというが、改築の歴史をそのまま残している。

3



ロビーの柱

木材の質の高さだけでなく、職人の技も高かった。それが表れているのがこの柱であり、木の皮のように彫刻がほどこされている。この木は岐阜県の県木であるイチイを用いているという説と、立身出世を目指してエンジュを用いているという二つの説がある。



龍宮風呂

龍宮風呂は地下にあり、海底にあるような雰囲気を演出している。タイルの壁画がとても魅力的で、雑誌の撮影にも使われたことがある。描かれている魚の多くは縁起がいい魚。

ここ鳳明館のお風呂だけでなく、この当時のお風呂は、どこの旅館もとても深かったのだが、それは修学旅行の生徒たちを効率よくお風呂に入れるためだといわれている。それぞれのお風呂についている蛇口はせいぜい5個程度。そんな中で、300人も生徒を収容しているため、とにかくお風呂の回転率が重視される。パッと浸かって出られるよう、立ったまま入っても十分なほどの深さになっているということである。

ひょうたん風呂

ひょうたんの形のひょうたん風呂は、タイルの色味が可愛らしい。当時のタイルはもう手に入らないため、修復するときには似たもので代用している。そのため床を見ると少し色味の違うところがあり、その歴史を感じることができる。



4 玄関・お帳場



おおとり風呂

改築されてできた鍵のかかるお風呂。こじんまりと小さく、1人から2人で、先生たちが利用していたと言われている。



玄関のたたきが他の2館に比べて非常にシンプルなもの下宿時代の名残りだろう。比べてみるとその違いがよくわかる。

また、お帳場の窓の上には、三館とも鳳凰の装飾がほどこされており、少しずつ違っているところにこだわりが表れている。



1 白浜

床の間には部屋の名前にちなみ、白浜から見える富士山や白雲が装飾されている。また、天井が他ではあまり見られない、斜めの線で構成されたダイナミックな作りになっており、これは隣の糸びすの天井の曲線と対比されているのではないかとされている。



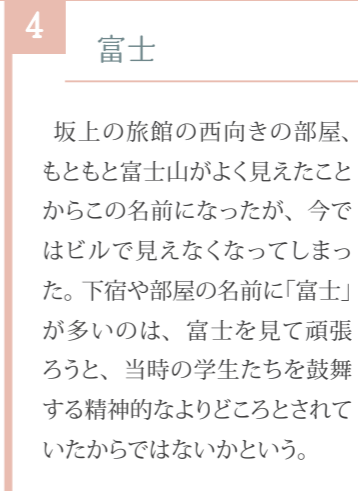
2 末広

この部屋が末広である所以は、松竹梅の3種類の木材が部屋のつくりに使われていることにある。床の間の落とし掛けと床柱に梅が、落とし掛けの奥には竹が、そして天井棟木に松が使われている。この床柱のように鳳明館でよく見られるツルツルとした木は磨き梅と呼ばれる。



3 千鳥

床柱と狛潜りが特徴的な部屋。うねうねと屈曲した梅の床柱に合わせて、狛潜りも自然な曲線を描いている。まず木を買ってきて、その木材を見てからしつらえを考えたという創業者のこだわりが見える。



4 富士

坂上の旅館の西向きの部屋、もともと富士山がよく見えたことからこの名前になったが、今ではビルで見えなくなってしまった。下宿や部屋の名前に「富士」が多いのは、富士を見て頑張ろうと、当時の学生たちを鼓舞する精神的なよりどころとされていたからではないかという。



10 糸びす

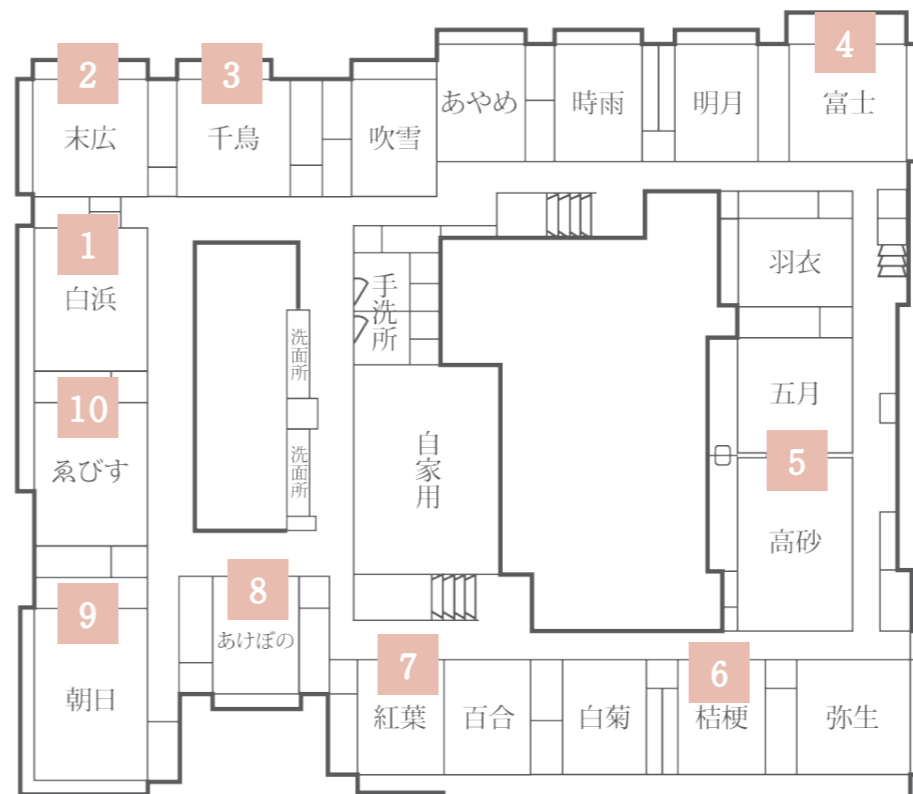
鳳明館で一番縁起がいいといわれるこの部屋には、様々な縁起物が表されている。丸い天井は末広りの傘を模しているといわれ、他の旅館にも共通してみられたそうだ。窓には糸びす様の装飾がなされ、その窓の形はうちでのこづちのようにになっている。

また、その隣の窓は末広りの三角形で、松明や扇、糸びす様が鯛を釣る投網を表しているのではないかとされている。窓の三角形に呼応するように、床柱には枝分かれしたザクロの木が用いられ、縁起のいい登り籠のようにも見える。

このように、至るところにこだわりが見られ、また部屋の前の廊下には幸を守るコウモリの装飾もほどこされている。



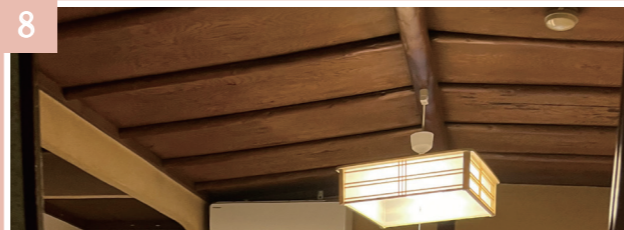
本館二階



9 朝日

ここは鳳明館の中で最も床の間が立派な部屋である。旅館の床の間は、茶室の格式高いシンプルな造りとは異なり、様々な種類の木を使い、装飾性が高いのが特徴である。この床の間にはケヤキやサルスベリが使われている。また、窓からの光を柵に当てるための狛潜りは、それぞれの部屋に合わせた個性的な形をしており、その遊び心が見る人を楽しませてくれる。

▶ 柔らかな壁と硬い木 (p14 : M1 王)



8 あげぼの

この部屋の天井には、今はもう手に入れることのできない屋久杉が使われている。ここは玄関の真上に位置していることから、天井にいい木が使われているのではないかとされている。旅館や下宿は寝る時間も長いため、天井にも非常にこだわっている。

7 紅葉

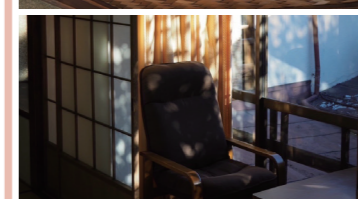
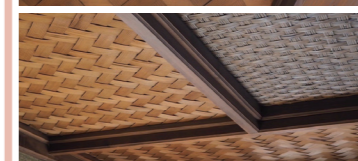
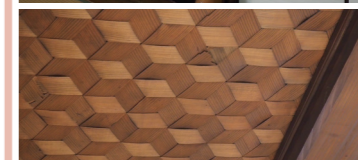
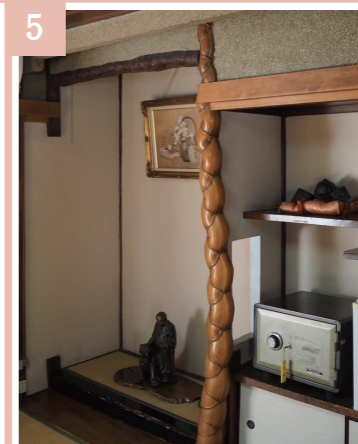
台町別館の庭と本館の看板が間近に見える、景色を楽しむことができる。台町別館と本館はお互いが借景となり、趣のある景色を作っている。窓の手すりも創業当時のまま残されているといい、保存率の高さが窺える。

▶ 跳ね上がった「鳳」の字 (p14 : M1 松本)



6 桔梗

桔梗という部屋の名前ながら、この床柱にはツツジの木が使われている。また、この部屋からは台町別館のツツジがとても綺麗に見える。



5 五月・高砂

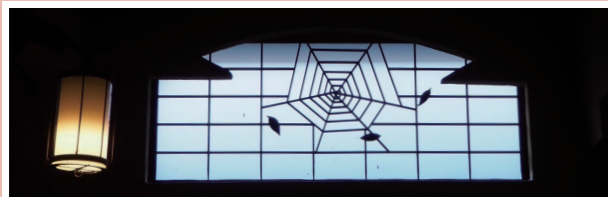
五月の床の間の特徴的な床柱は亀甲竹という。この亀甲竹は非常に立派で、竹の節と節がくっついて突然変異したものが、亀の甲羅のように見えることから、亀の長寿にあやかった縁起物である。

対する高砂の床の間には、四角い四方竹が使われており、二種類の竹の対比を楽しめる。

また、天井は綺麗な網代天井になっており、様々な模様が施されている。六角形の模様は、こちらも亀の甲羅を模している。

この二部屋は仕切りで分けることもできるが、現在は一続きの部屋として使われている。本館で唯一洗面所がついている部屋で、とても広々としている。

▶ 中庭に面した縁側 (p14 : M1 木村)



窓

台町別館の至るところに、細かな装飾がなされており、当時の職人の腕の高さが窺える。遊び心も満載で、廊下を歩くだけでこの建築を楽しむことができる。



11 二階廊下

日当たりの良い二階廊下。採光と風通しを確保するために、窓の下の建具も開くようになっている。



10

水回り

二階トイレ前の天井や壁には水車に使われていた部材が埋め込まれている。これは和式建築によく見られる意匠で、火事を防ぐという願掛けがされている。



1

玄関

玄関のたたきには基石に使われる那智黒石が敷かれている。その所々には花模様が忍ばせてあり、遊び心のあるデザインである。廊下にもこの黒石が使われている。



2

応接間

唯一洋風な作りのこの部屋には、ステンドグラスが取り入れられている。鳳明館存続の危機に話し合いが行われたのがこの部屋。かつては商談の場として使われていたといい、どの時代においても大事な交渉の空間となっている。



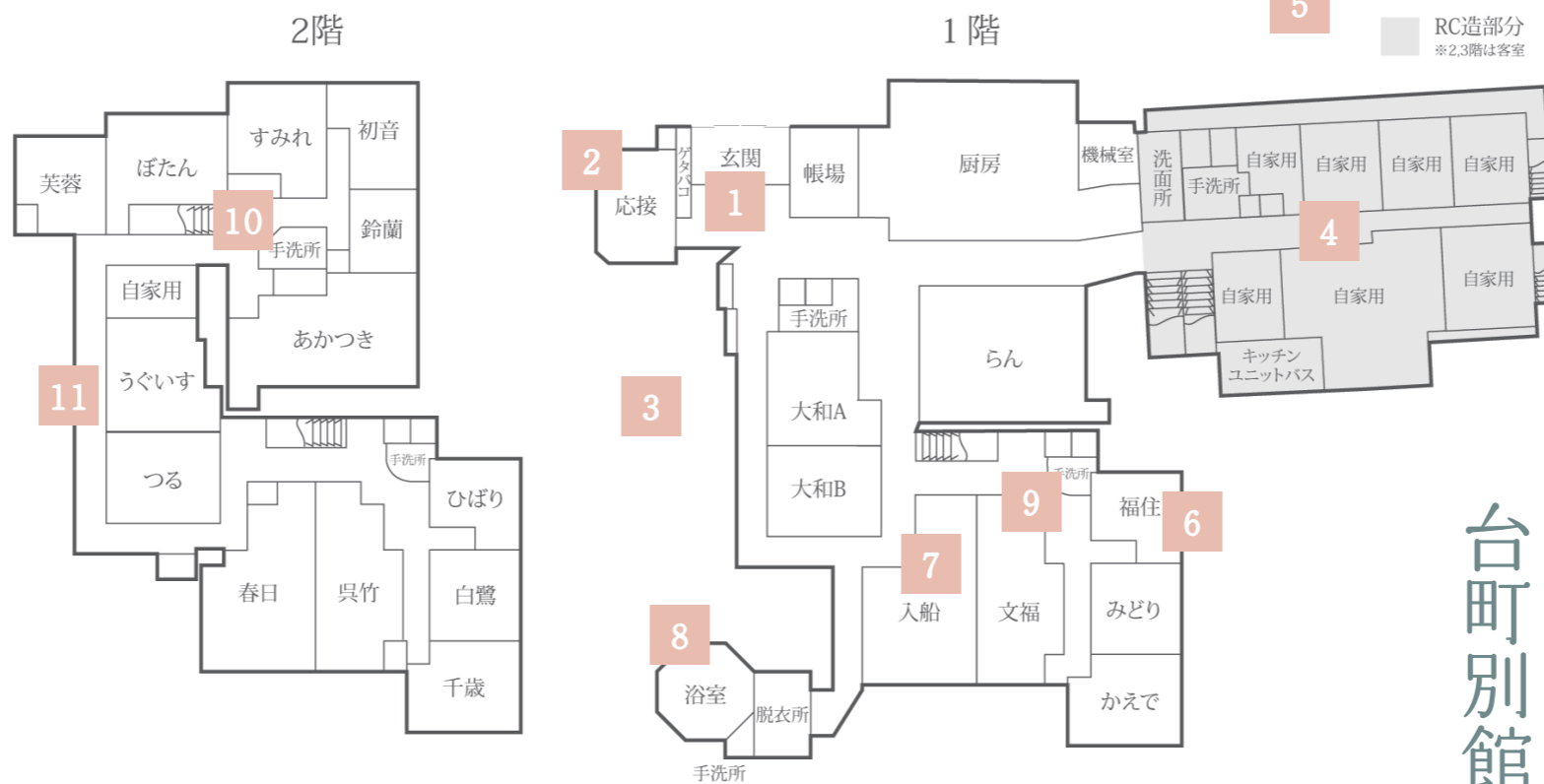
3



庭園

本郷でこれだけの庭園が残されているのは、この台町別館だけである。四季折々の景色を楽しむことができ、動物たちの置き物も可愛らしい。道路からは閉じているように見えて、台町別館と本館の二階からは綺麗に見える。そして、本館が借景となり庭の後ろ見えることで、今でも風情ある景色を楽しめる。

▼ 応接間から見た庭園



4

RC部分

修学旅行生が増え、部屋が足りなくなったときに増築したのが、このRC造の部分。木造部分の玉砂利の廊下を奥に進むと、雰囲気は一変し、非常にシンプルな作りの廊下と部屋が見れる。



5

屋上

台町別館の屋上からは文京区一体が見渡せる。台町別館の明治の屋根瓦から文京シビックセンターまで、明治から令和の歴史を感じることができる。

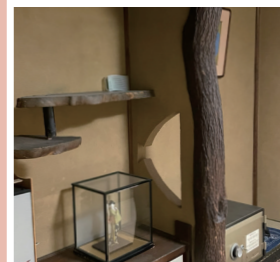
※通常は立入不可



6

福住

部屋の障子に描かれているのは米を狙うねずみ。寓話のような可愛らしさがある。福住のように生徒が泊まる部屋には、前室がないものも多いが、どの部屋にも軒がついており、廊下は街中の路地のような空間になっている。



8

お風呂

六角形の離れは後から増築されたお風呂である。他の二館のタイルのお風呂とは異なり、新しいお風呂。



7

入舟

旅館として作られた台町別館の部屋は、豊かな前室がある。部屋の扉には入舟に合わせて、船の透かしが入っているなどとても手が込んでいる。ここは先生が泊まっていた部屋であり、部屋の中にはマイクと書かれたボタンが残っている。広縁があったり、天井の大胆な木材の使い方であったりと、豪華なつくりになっている。



14 千鳥

扉に描かれた「鳥」の字はとりの絵になっている。周りにも浜千鳥が描かれ、欄間は羽ばたいている翼の形を表す。



13

末広

末広という名を表すように、この部屋の天井には大きな扇が設えてあり、開いている扇と閉じている扇の両方が楽しめる。

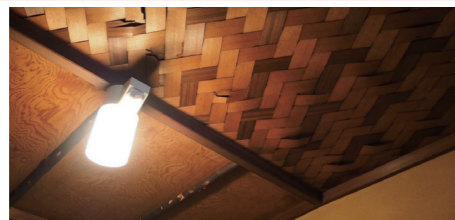
この扇には、水車板が用いられており、他にも館内の様々な箇所で使用されている端材である。そして上に扇あれば下にも扇ありと、襖にも扇が描かれている。



12 弥生

弥生と桔梗は森川別館で最も格式高い部屋。廊下から直接見えないように、趣のある扉と前室があり、前室のわずかな空間にも網代天井が設えられている。

障子に描かれている花見の絵は、右下の花見幕の形が外の景色を取り込む構図になっている。



11

朝日

東側の端にある朝日はマツを中心に設えてある。そして特徴的なのが天井の造り。壁に向かって上がる逆勾配は、あたかも部屋の中が屋外かのように見せている。



1

廊下

広い廊下が一本通り、その左右に枝分かれして部屋がついているという団体旅館らしいシンプルな造り。上は船底天井となっており、それぞれの部屋の前には軒が出て、路地のような空間になっている。



廊下に面した障子に描かれた梅の木には、鶯が隠れている。部屋の外からも楽しめる、ちょっとした遊び心が詰まっている。



2

洗面所

廊下の洗面台は全てタイルの色味やデザインが異なり、色々な雰囲気を楽しめる。



洗面台上の窓にも様々な装飾が施され、昭和のモールガラスが用いられたレトロさを楽しめる。

▶ 雨ふる手洗い場 (p14: M1 星)



4

ローマ風呂

当時は円形浴場をローマ風呂と呼んでいたが、ここでは壁画でもローマの広間を描いている。

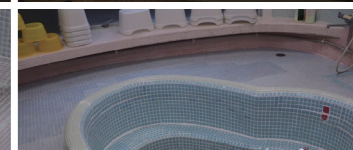
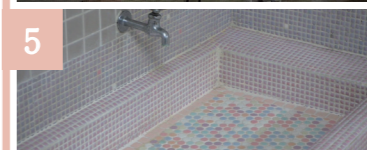
▶ 凝ったデザインの風呂場 (p14: M2 東條)



5

千鳥風呂

浴槽が千鳥の形をした千鳥風呂。洗面所のタイルは貴重な昭和パステルで可愛い色味。



6

旅館の裏側

階段脇にはリネン室の隠し扉が潜んでいる。

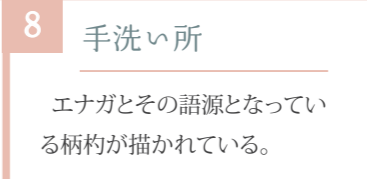
食事を運ぶためのリフトの横に伝声管が残っている。



8

手洗い所

エナガとその語源となっている柄杓が描かれている。



狂言で五穀豊穡を祝う演目である「三番叟」を表したガラス窓。狂言師と能の舞台である松が描かれ、建具を動かすことで狂言師が舞う様子を表現している。

鳳明館で発見!

私の「推し」スポット

鳳明館を見学したマガジン編集部の方に、それぞれの「推し」スポットを聞きました。



中庭に面した縁側

M1/ 木村



一つ一つの部屋に個性があり、全く違った雰囲気を楽しめるのがとても魅力的でした。ディテールが綺麗なのはもちろんですが、この部屋で感じた魅力は下宿の特徴でもある中庭を活かした縁側。午後の日差しが差し込む、あたたかくて穏やかな空間は、いつまでものんびりしたい居心地の良さを感じました。

@本館 1階 客室「五月・高砂」

凝ったデザインの風呂場

M2/ 東條



三館いずれも浴場のデザインが凝っていたのが印象的。鳳明館は大量の修学旅行生を受け入れていた時期があるため、どこの浴場も洗い場が広めに取られているが、洗い場の壁面にはタイル画が施されており、「ローマ風呂」には薄めの色彩で古代ローマを思わせる建築が描かれている。

@森川別館 1階

雨ふる手洗い場

M1/ 星



手洗い場ごとにタイルや装飾が異なっているのが、遊び心を感じて印象的でした。特にこの手洗い場の、静かな廊下に雨ふる音が聞こえてきそうな窓の飾りがお気に入りです。直線を組み合わせたシンプルなデザインですが、タイルの色の渋みや石を敷き詰めたような底面の模様と合わせて趣ある雰囲気を感じられます。

@森川別館 3階 客室「千鳥」前

跳ね上がった「鳳」の字

M1/ 松本



本館の看板の「鳳」の漢字をよく見てみると、よく見ると右側だけでなく左側も跳ね上がっていました。鳳凰が翼を広げた姿をイメージしたのでは?と女将さんはおっしゃっていましたが、建築主の細部へのこだわりとオリジナリティが感じられて面白かったです。

@本館 玄関 (2階客室「紅葉」から撮影)

柔らかな壁と硬い木

M1/ 王



各部屋の床の間の壁の隙間が特に印象的でした。私にとって、床の間は和室の中で非常に特別な空間であり、濃厚な伝統美を感じさせます。鳳明館は、自然な樹木と柔らかく面白い形状の壁が組み合わせ、空間に精緻で独特な魅力を加えています。特に、朝日の部屋のひょうたん形のデザインは深く印象に残りました。

@本館 2階 客室「朝日」

COLUMN

WEB MAGAZINE

第8回えきまち研究会



富士吉田プロジェクト

11月に下吉田駅周辺で実施した社会実験の調査報告と振り返りワークショップを行いました。今回得た意見をもとに、下吉田駅周辺の将来像がどうあるべきか、提言をまとめる予定です。(M2 東條)

続きはコチラ >>>

<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



PJ 界限ホップ巡り



上野プロジェクト

ホッププロジェクトの学部生への紹介をかねて、永野先生にツアーをしてもらいながらホップの輪が広がった界限をまちあるぎしました。最後はみんなで地元ブルーワリーのビールをいただきました。(M1 和栗)

MACHI BINGO

マガジン片手に、まちを歩こう



本郷の看板

鳳明館本館の看板に惹かれたので、本郷にある看板を集めてみました。といってもたくさんあったため、今回は「黒文字+明朝体」という条件で絞り込みをしました。旅館から飲食店、不動産屋など... 馴染みのある看板はありましたか? (M1 松本)

1月号担当
M1 木村千咲



毎年恒例の鳳明館で行うデザ研忘年会がきっかけでこの企画をやってみることに。想像よりだいぶボリュームになってしまってた大変でしたが、女将さんの貴重なお話も聞いて、見どころ満載の鳳明館ツアーはとても楽しかったです。マガジンでは伝えきれない魅力がたくさんあるので実際に訪れてみて欲しいです!